

双方向（インターアクティブ）討議型授業の必要条件と課題

— 「なまはげ」になぞらえた考察 —

The Conditions for the Effective Interactive Discussion Method of Teaching
Referring the Event Named “Namahage”

小笠原 宏*

Hiroshi Ogasawara

教育成果の向上と授業の活性化を企図して双方向型討議型授業の導入が唱われ実施されているが、その可否及び成功のための条件などの認識が正しくされないまま、似て非なるような事例が多い。本来の双方向型授業の目的と、利点難点を明確にすると共に何が必要かを東北地方のなまはげという有名な祭り制度を参考に考察してみると現状も分かりやすい。

キーワード：双方向型授業 討議型授業 イベント 教育実践

[1] 「なまはげ」にみる双方向討議型授業との共通項の考察

ちょうど興味深い事例として、実は本稿メ切り間際に新聞に「なまはげ」という東北の伝統的風習行事に言及した記事が掲載された。直接この伝統風習を取り上げたわけではないし、ましてや双方向型討議授業の関連で言及されているものでは全くない。しかしながらその中でこの全国的に有名な伝統風習の歴史や位置づけ、現状での問題点などを間接的に読み取り理解し考えてみると、本稿の主題である双方向型討議授業という仕組みややり方との共通点が多いように思える。そこで、急遽唐突の感を否めないかも知れないが、ここで「なまはげ」をあえて取り上げて論じ説明することにした。

「なまはげ」とは、東北地方の、伝統行事あるいは風習として非常に有名なものである。細部に至る全てを筆者にしても熟知するものではない。しかし名前だけでも非常に全国的に知れ渡っているのは事実であり、新聞でも解説されているように、これを一種の祭りあるいはイベントとしてとらえ、東北地方の観光の目玉としてツアーが組まれたりしていることから、定着し人気のあるイベントであるのは確かである。新聞、テレビなどあるいは文献などで、広く取り上げられ照会されてきた歴史からも、細部まで知らなくても名前以上に、内容についても、色々知っている向きも多いといえる。

祭礼とか行事だとかいうものが、たとえば地方の町おこしとか活性化といった動きとの関連で注目を浴びてきている。趣旨は違うが似たようなものに、「ゆるキャラ」なる、ご当地マスコットなどの作成、制定も盛んである。これらはいわばマーケティングという分野の考察や分析を実践として取り入れているアクションなり施策なりの一つである。同様に、町おこし、地域活性化のために、色々特色のある行事や習俗が取り上げられているが、その中でも、このなまはげという習俗は、相当に古くから広く一般的に知れ渡った東北地方の風物として認知されている。筆者もそれに関する記述を、最近の新聞で柳田國男の著作、業績紹介を述べた小品の文章で取り上げていたことを冒頭に述べたが、それにしても、2011年3月の東北大地震とそれに連なる大津波という災害被害があってから、東北という地方の物事が、その復興その他の絡みで頻繁に取り上げられ注目されているという背景が現状ではある。まさに天災により打撃を受けた東北地方の復興と活性化を成し遂げるかという重要な課題に関する議論の中で、このなまはげという行事、習俗が再び言及されているのは当然のこともいえる。

この点、唐突であるが、授業や講義といった従来型教育手法に関して溜まってきた不満や疑問のようなものを契機に、よりよい授業とか教育手法といったことに関する活動が盛んに喧伝される昨今の教育現場事情と似ているように筆者には思える。何も災害に匹敵するような、教育界、学校制度そのものを震撼させたり崩壊させたりするような事態が起こったわけでも、起こりつつあるわけでもない。教育というものの成果の測定自体が容易ではない。一時的、一律的な評価基準や、成果の具体的な中身を、公平にまた効率よく示す基準や仕組みも、常に熱望されるが、当然ながら存在しない。試行錯誤が繰り返されるばかりであり、敢えていえば、試行錯誤することにこそ意義があるともいえる分野である。しかしながら具体的な定義も現実には曖昧でありながら、いわゆる「ゆとり教育」が、その継続による弊害が指摘され、結果として批判的になり、諸悪の根源のように言われる昨今は、ある意味疲弊した教育事情という表現もあながち外れたモノではないと言えるだろう。

ゆとり教育なるものの具体的な中身は様々なとらえ方があるし、それ自体も悪いことばかり、マイナスの効果しか無いわけではない。何事にも一長一短、良い点悪い点がセットで必ず存在するわけだし、それは不可分である。おいしいところを食べるにしても、不可分なまずいところも併せて食べ、吸収しなければならないというだけのことである。ゆとり教育の狙いや目的は、決して悪くないといえるが、一つにはそれを受ける側つまり学生、生徒の側の学習態度、受容態度にも問題なり、検討すべきポイントがあったということでもあろう。

一律に学習態度が悪いというつもりは毛頭無いし、そんなことは第一あり得ない。問題は、斑（まだら）と私は表現するように、良いものと悪いものが混在し、同居しているということである。それは態度の良い学生と悪い学生が混在しているという単純な意味だけではない。一律に同様な資質の学生をグループ化したり、選抜したりして学習集団を組成しても、大して事態は変

わからないのが現実である。たとえていえば、外気に触れている部分を例えば皮（かわ）と定義して、そこに空気にふれていることによりばい菌がついているので、皮むきで皮を剥いて捨てるとしよう。どこまでが皮でどこまで剥けばいいのか正確に定義できるだろうか？にんじんの本体は剥けば剥くほど減ってしまうだけのことだろう。静的にみても、明確に識別できないということである。また、学生のマインドや受講態度などは、時間経過とともに、動的に変化する。インセンティブ、モチーフと言われる学習態度にプラスに繋がる「高揚度」のようなものにしても、例えば90分の授業を見てみても分かる様に、時々刻々と集中度は変わり変化する。当たり前のことである。気分を乗せ、集中することにメリハリをきかせながら、過ごすことが出来なければ、体が、心が持たない。つまり、同一の人間、学習態度の善し悪しに関わらず皆一律にその内面に於いて、良い学習態度、悪い学習態度、気分事態が変化するという意味でのそれらが混在した斑状態だからなのである。この認識ととらえ方は極めて重要である。その混在した状況から決して逃れられない。勿論斑状態をなくするという努力は、全て無駄とは言えない。緊張感や危機感を受講中の学生に持たせようとするのは、良い刺激となる可能性は相当高いからである。だがそれが全てに作用するわけでもないのも事実である。刺激を与え続けることには相当量のパワーが教える側にも要求する。投入した物理的、精神的労力にどれだけの成果が見込めるかといえば、その付加的な限界効果は低減することは明白である。時には、ゼロになることも無いわけではない。従ってそういった労力やプレッシャーをかけ続けることが必ずしも効率的でないと言えるわけである。そのことは少なくとも認識しておく必要がある。掛ける労力も、漠然とした言い方であるが、「ほどほど」が良いと言えるわけである。漫然とプレッシャーを与え続けることは避けるべきである。

具体的に、民俗学者として名高い柳田國男の著作の中で、「なまはげ」という習俗は、興味深い例として紹介されている。双方向型授業としての討議型授業という手法と、「なまはげ」という習俗の周辺環境が似ているところを以下に参照しながら説明したい。前者が「なまはげ」と中身が同じという意味ではない。比較、参照しながら述べると筆者の分析及び主張がわかりやすいと考えられるからである。

「なまはげ」という習俗は、東北地方の年中行事として恒例化し、その実行に際しては、様々な準備が必要であり、東北の多くの村落等数十以上に及んで現在でも実施されているらしいが、当然ながら様々なヴァリエーションがあるらしい。どれが正しいとかどれが違っているとか、すぐに本家本元だとか、正調だとかいった議論になる場合があるらしいが、それははっきりいってどうでも良い。それぞれの地域の諸事情に併せて変化したりしていくのは当然のことであり、それは変化とか衰退とかいうよりも進化とでもとらえて理解する方が良い。伝統的古くからの習慣、習俗を守り抜き引き続き実施しているということこそが素晴らしいことである。ここでも事細かく「なまはげ」考を繰り広げるつもりもない。大まかなポイントして絞っておくと、冬のある時

期の夜半に、なまはげと呼ばれる鬼の扮装をした村人が、怠け者はいないかという意味の物言いを大声で叫びなら、各家を回り家の中に押し入り、特に子供に向かって、威嚇したり大きな声をかけたりして子供たちを脅かすというものである。その脅かしをうけて、泣いた子供は、無病息災で一年が健やかに成長できるとか、その家には災厄よけになるという言い伝えがあるというものである。なまはげというのは、方言で、ナマというのはたき火など暖房に長時間あたってできた皮膚たこのことをいうらしく、それをはがすつまり、仕事もせずぬくぬくと暖房にあたって熱だこができていような怠け者を、懲らしめるというのが元来の意味らしい。この習慣は観光行事としても興味を引き、この実施される時期には、東北の村落などへの観光客を運ぶツアーもあり、その場合は旅館などになるわけだが、逆にそれら観光客向けのなまはげという行事を専門に行うということもあるということである。即ち一つの観光スポットならぬ観光イベントとなっているわけである。そういった観光客向けのなまはげは、観光的要素が強くされ、有る意味伝統的ななまはげとは異なっているという批判や意見もあるらしいが、重要な観光事業という観点からすれば非常に盛んな行事であると言えるらしい。ただ、そういった観光事業としてではなく、本来の地域行事として脈々と行われてきた、ひなびた山奥、遠隔地でのなまはげは、廃れてしまい実施されなくなった地域もあるらしい。過疎現象などにより、なまはげの役割をする、これはおおむね若者が担当してきたらしいが、そういった人材難（都会へ出てしまった）及び、なまはげには供応しなければならず、門口を回ってくるなまはげには、お礼の意味もかねて、相応の料理や酒を迎え膳として用意するのが本来の姿であるということらしいが、その供応膳が用意できない家も出てきたということらしい。なまはげの扮装にしてもそれぞれ地域によった違いがあり、特色を持っているらしいが、基本的な中身や装備はおおむね一緒であり、その衣装にしても子供を怖がらすという目的に合わせて、おもしろおかしくユーモアを忘れないが、怖いといったように工夫がされているらしいし、その扮装だけでなく、挙動全て（発声や歩き方等々）に作法なり伝統があるらしい。規則や決まりがこれといってあるわけではなく、長年の習俗の繰り返しの中で作法や伝統という表現が当てはまるように連綿と培われてきた、扮装及びノウハウがあるということである。従って仕様書やマニュアルのようなものがきちんと整備されているわけでも無いが、それを守り持続していきたいという現地の生活当事者たちの良識と熱意と忍耐によって、盛んに行われているわけである。

しかしながら、ここ数年、このなまはげにも、信じられないような問題が起きてしまった。それはどういうことかということ、過疎化現象が進んだとか、本来のなまはげが廃れてきたといった、表面的な問題ではない。むしろ先にも述べたように、町おこしや地域活性化、その為の観光資源化という意味では大きな成功例、定着例と言われるなまはげという習俗であるが、定着、成功の結果として、逆に本来の姿でない、本来の趣旨をきちんと理解しないでなまはげを一つの行事、イベントとしてのみ実行する輩が出てきてしまったということらしい。おそらくこういった現象

は、多かれ少なかれ多くの行事や習俗において経年の中で起こってくることは容易に想像がつくし、不可避であるとすら言える。

おそらく新聞で大々的に報道される以前にも、小さな逸脱や問題は当然あったと想像されるが、新聞報道によれば、なまはげに扮したアルバイトの若者が、暴走して狼藉をはたらいて、警察沙汰となったものである。つまり、脅かすという行為、乱暴を働くという行為を言葉通りにとった若者の中に、習俗として伝統としての認識を全くもたないままに、単なる威嚇行動、乱暴を働いたというものであり、観光客など受け手の側が、あまりの程度のひどさに警察に訴えたということらしい。限られた環境の合意に基づく威嚇行為や、土足で家屋に踏み入るといった乱暴行為は、ことを大げさに荒立てて訴えるほどには通常起こりえない。有る意味それはルール違反になる。しかしながらその程度が、本来の趣旨を大きく逸脱してしまうような場合、免責でなくなるというのも一つの予防効果として必要であろう。つまり威嚇行動や乱暴行為が、手段であって、目的ではないという原則が破られたがごとき事態になったとき、問題として表面化してしまうということである。具体的な行為で警察事犯になったのは、なまはげが訪れた旅館（おそらく観光行事の一環としてのなまはげだと思われる）で、女性用浴室に乱入して、痴漢行為のようなことに及んだということだったらしい。確かにこれは甚だしくなまはげの趣旨から逸脱した、必然性の無い無用な違法行為と批判されても仕方ない。勢いづけとしてなまはげは、飲酒していたらしいが、飲酒自体が悪いということも本来は言えない。縁起物だからといった、こういった行事でみられる一種の無礼講としての免責特権があることも、暗黙の家の社会のルールとして習俗、行事の一部であると言えるからである。それがいつしか、実際になまはげに扮した人間の結局は人間性なり思考力の問題であろうが、脅かせばよい、乱暴であれば良いというような大きな勘違いを惹起するとともに、そういった狼藉無茶行為ができるから、なまはげは面白い、良いといったような認識が広まるといふ悪循環の結果の出来事のように思えてならない。

こういった事例は、なまはげに限らずあらゆる場面、事象において発生しうるものであることは、歴史的にも明らかである。盛んになり普及するといった大きな市場化が実現すればするほど余計その危険性は現実のものとなる。結果としてこのなまはげの例でも、地元の地方自治体などが中心となり、公的法的なものではないながら、なまはげ検定試験といった、認証、検定制度を興し、それを運営することによって、なまはげの規格化、統一化を品質保証という視点を重視した伝統習俗の保護と継承ということを始めたという。例として、なまはげに扮装する人間は、このなまはげ検定あるいは同等の研修のようなものをきちんと修了しないと、アルバイトとしても採用がないといったように、たかがお祭りなりイベントなりの参加についてそのような規制色を強めるのはいかがなものかと考える向きも当然あると思えるが、現実には動き出しているらしい。何事も、一つの暗黙のルール、慣習法のようなもので守られうまく機能していたものが、拡大し大きくなることによって、予想外なり、存続に対してマイナスの影響を及ぼすと危惧されるよう

な勢力なり事例が多発してきて社会問題になる典型例と言えよう。ここで重要な点は、何にせよ一度規制が導入されると、その規制もいつか機能しないで形骸化し、また新たな規制が必要になるといったサイクルが始まることが多いということである。規則を決めるが、当然ながらそれらを破る、履行しない人間が出てくる。皮肉な言い方が、規則や法律を決めることと、それらを皆が守るかどうかは別問題であり、規則にしても意図的に破る場合もあれば、解釈の問題から本人には破っているとか違反しているといった意識が無い向きも同様に存在するということが重要なことである。無意識の違反には罪がないといったことを言いたいのではない。この無意識違反集団に多くの場合欠けているのは、例えばなまはげを例にすれば、なまはげという習俗、そしてそれを円滑に実行するのに必要なインフラともいべき付随設備や訓練といったものに対する理解と認識、つまり伝統に結果的になったと言える目的なり意義なりというものに対する明確な認識であり、理解である。別の言い方をすれば、変化があっても当然と考えることからすれば、少なくとも問題意識や分からないのならば議論をしようという知的探求心のようなものすら欠如している向きが有るということであろう。伝統文化や習俗として、なまはげを見て理解することとは、例えば長年にわたって様々な形態で関わり、学び、探求してきたことによって、自ずと理解が深まり、様々な暗黙のルールや規制を遵守するという姿勢、つまりお約束をきちんと理解しながら、機能的になまはげを実行し、次々と伝承されいていくというのが通常の姿であろう。当然ながら、有る意味自浄努力という言い方も出来るかもしれないが、参加者お互いの他者を見る目が大きな社会全体の規制効果を果たすというのがもっとも望まれる効果ではないだろうか。ただこのサイクルはどうしたら出来るのかという問いかけをすると甚だ回答に困ると言わざるを得ない。規制のサイクル、繰り返しに入るだけだといっても、もちろん、だから規制は不要であるという意味ではない。何らかの暴走行為に対しては断固とした処置をとることにより、本体を守り育てることは可能であり、必要である。だが、絶対ではどうやってもあり得ない。そこに奥深い問題と議論が存在するということである。

以上のような「なまはげ」に関する習俗及びそれに関連するものごと全てがたどってきた、誕生から発展、変遷、そして現状までの流れを考えて見ると、突拍子も無いように感じるかも知れないが、実は教育手法としての双方向型討議授業という仕組みを考えたときに、大いなる類似性があるように思えてならないということである。なまはげという行事は、一つの祭りなりイベントである。目的ではなく一つの方法である。村人など集団の無病息災と厄除けを祈願する一つの方法である。一つの宗教的な儀式としてとらえられている訳だし、少なくとも伝承すべき重要な習俗習慣として定着し、現在まで継続されている。鬼が出てきて悪者を（怠け者）を退治するという社会的な意味合いがある。コミュニティーとしての団結を保ちつつ一つの祈願を行うというものである。その目的がメインであって、その主役なり主要キャラクターが、なまはげなる想像上の鬼あるいは存在を具現化したものであり、それが怠け者退治をするという設定がなされてい

る。そのかぶり物自体も、インターネットなどの情報網を通じて見るのが可能であり、ありきたりの材料をつかい、できるだけ怖い、グロテスクな形状をした鬼の顔、携行する飾りとしての道具も、鉈形状の光ものなど、有る意味人間を怖がらせるために道具としてうまく出来ている。誇張や省略も十分にされていて、むしろユーモラスなところもある。そして次にはその扮装をして、脅かして回る役回りの人間である。人を脅かすような仕草や強面をすることにより、幼い子供などは大きな声、仰々しい仕草に圧倒されて泣き出す。泣き出さない子供には厄除けにならないので、おとなしいなまはげなどの場合は、抱き上げている親がつねったりして泣かせるようにする場合もあるという。いずれにせよ、その扮装の準備は、手間がかかり伝統として引き継がれる。また挙動の仕方も探求心をもとに研究されている。何も決まった動きがあるわけではないが、十分見応えのある動きをするようになっており、長年その役回り続けることにより習熟してくるということらしい。

いずれにせよ、なまはげと一言で言ってしまうれば簡単に聞こえるが、東北ならではの民話伝承などの長い歴史と文化が背景にあり、しかも一朝一夕の思いつき以上の、工夫と準備のための労力が要求されているということは明白であろう。仕組みとしてのなまはげというものを当然ながら、祭りや行事として他の地域に持って行くことは当然可能である。しかし気を付けなければならないのは、「もどき」や模倣に過ぎないという評価や位置づけで終わらせないということである。目的を明確にし、その為の手段としてのなまはげという習俗を成功し定着させることが必要である。名前だっとなまはげという呼び方をする必要は無いだろう。寒い東北地方ならではの発祥による呼び方である以上、それぞれの実施時期や地域によって、例えば、なまはげと違った名前が提案されても悪くないし、鬼役の扮装や衣装なども様々に新しいものを取り入れて行けばよいだろう。また鬼でなくて守護神なりエンジェルなど、極端に言えば、守護神や天使などに鬼から変わってしまうことも可能かも知れない。もちろん、「怠け者を懲らしめる」というコンセプトが重要であるとするればそれは良い意味での改変なり昇華とも言えるが、逆にいえば逸脱、本末転倒とも言える方向性になる。議論なり検討が必要なポイントでもある。だが可能性としては排除すべきでは無いとも言える。そして同様に、「なまはげ」相当のキャラクターの現場での挙動にしても、異なった挙動が提案されても良いだろう。要は、目的を忘れない変わらぬ探求心と挑戦の心意気は重要である。こうして考えると、祭り、イベントといった切り口、年中行事といった観点から見てみれば、様々な習俗、習慣として定着し継続し伝統になっているものがなまはげに限らず存在する。同様の形態として節分の豆まきなど、例を挙げたら非常に多い。イベントとしての準備の大変さや、イベント自体が大がかりかそうでないかという視点からみればそれぞれ違いが当然あるが、基本的な考え方や歴史をみれば、変遷しながらも定着して適合を続けている。いわゆる時と場所と人によって円滑に回るように試行錯誤されているということである。漫然と同じ習俗を単に繰り返すのか、時代に合わないところは、また環境に応じての可否を検討して改変する

のか、中心メンバーなり一つの集合体が議論を巻き起こしまた継続して運営していくということである。そういった中心メンバーの中では当然、様々な議論や意見が戦わされているだろう。伝統に固執する、一般的な統合ルールのようなものが無くても、二つのそれらの行事の本来の目的を逸脱しないようにチェックし、またお互いに再確認しながら続ける伝統を守るという作業を彼らはしているに過ぎない。伝統を守るというのは、古くからのものを何も考えず継続し続けることではない。つまり伝統という、ある意味漠然とした考え方に、隷属しているに過ぎない。何か規則やルールのようなものを、明文化や法制化したとしても、時代とともに状況は変化するし、人の気持ち自体も、前述のように、どう時点であっても、斑模様で多様である。違った意識の人間が混在するだけでなく、同一の人間でさえ時に応じて、意識や気持ちは当然変わることを認識すれば良いことである。どんなに議論を激しくしても、攻防しても、お互いに目的が、ゴールが同じであるという共有感と認識がある限り、議論は生産的でありけんかのような対立関係で議論は終わらない。何らかの結論がでた場合、議論を尽くしたといえるのは、全員一丸となってその方向への打開策、代替案を実行することが次に求められるからである。なまはげをはじめとする地域イベント、行事の目的は二つである。一つは参加住民の健康、繁栄、無病息災、厄除けなど色々言い方があるが、皆の健康と幸福を願うことである。もう一つは地域住民の連帯感の醸成である。これら二つの単純かつ漠然とした目的は、有る意味曖昧に見えるかも知れないが、結果的にこの程度のものであるから維持継続できるのである。参加者全てという表現に換えることによって、より多くの参加者が、また内容が濃くなることも可能になる。現にそうやって時代を巡ってきている。それこそが、筆者が常々唱えるマーケティング活動の結果であり、課題である。つまり、市場に浸透、蔓延する「飽きる」と「慣れる」のムードの結果として、継続することが隷属になり、安定が沈滞、低迷に変わってしまうという事態に陥るわけである。そういった場合、参加者の中に、飽きや慣れが蔓延する結果として無意識に、本来の目的を忘れていくかのような状況が現出してしまいうからに他ならないといえる。何にせよ、盛り上がること、賑やかにすることが目的化してしまい、本来の祈願なり連帯共同意識の育成維持といった目的が結果的におざなりになってしまってしまうということである。これは一つの組織、共同体の意識の疲弊現象そのものであると言える。

[2] 双方向型討議授業について

ここで、双方向討議型授業という形式について目を転じて考察してみる。すると習俗としてのなまはげの辿ってきた、歴史、経緯、評価、位置づけなどがそのまま双方向討議型授業というシステムにもあてはまることに気づく。

双方向というのは基本的に教員及び学生という二つの対局の存在が共同で作り上げる教育機会、場である。教える教えられるという関係は、通常固定化している。学ぶというかたちの最も分か

りやすい形態が授業としての座学である。双方向型とは、それぞれが情報発信を行うモノであり、通常は教師から学生への一方通行がメインである。勿論双方向的な要素として、講義授業における質疑という行為がある。そして一般的にまず双方向という形態を考えたときに、教師側への学生側からの情報発信なりがあれば双方向の一つの実現ということが認知される。そして通常は、質問に丁寧に学生が納得するまで応えてくれることを学生は、外部は期待する。だが、そのとき重要なのはその質問なり疑問なりの根本は、最初に教師が与えた情報（授業）だということである。次に、学生の発した質問あるいは苦情や不満を、教員側は積極的に取り上げる。それらを元に、教員側から発信する情報や授業内容を、調整する。そして学生が理解するまでその多様な情報を、繰り返し発信しながら、学生との双方向のやり取りを続けていくというのが、一般的なイメージである。だがこれだけではまだまだ見かけの双方向に過ぎないし、純粋な双方向及び討議型授業とはならない。そのことを明確に理解できていないような教師も学生も多いように感じられるのが現状のように見える。本来の目的がかすんでしまったかにみえる「なまはげ」のようなものと言える所以はそこである。表面的に言いたいことを、自由に発言したり、応えたりすれば双方向型あるいは討議型の授業といえるわけではない。賑やかに見える、いわば枯れ木も山の賑わいと同じ状況である。それは単なる五月蠅い講義と似たようなモノである。簡単にいえば、双方向の本来の意味は、教員対学生という関係だけでなく、学生対学生という意見交換情報交換の経路が、全て活性化し活用されている授業である。それ故に、ケース・メソッドとよばれる討議型授業で、教員が果たす役割をファシリテーターというわけである。教えるとか導くとかいうよりも、意見や情報を裁く、交通整理の役割を行い、討議に秩序と学習成果に向けて向かわせるというのが主な業務である。勿論それは容易なものではない。統一された概念や知識を参加者に伝えるような授業であるならば、討議型授業などは無用の長物であり、効率が悪い。参加した学生がそれぞれの事前準備と、自ら展開する質問及び意見の開陳、他者による評価と反論といったプロセスによって、何らかの情報が得られるだけでなく検証されることになる。その準備や理解程度によって、個々の参加者の身につくモノ学ぶものはバラバラであり、多い少ないということが起こりうるのが討議型授業である。そこから各自が結論なり一つのプロジェクトとしての代替案を各自が持ち返れば、それこそが授業の目的である。だから、討議型授業で取り上げて議論を戦わせる主題については事前に十分な資料や情報が与えられなければならないし、与えられないのなら事前に自らの限られた時間の中で十分に収集し予習をし、自らの意見、見解を立論してこななければならないということである。実はこれこそが討議授業を成功すなわち自らが学んだ、理解したという学習度合いの多寡に影響を与える大きなポイントなのである。つまり投入した事前準備の多寡と、学習効果の大小は大きく関係があるのである。ある一つの目的に向かって皆で同じマインドで、生産的な議論を進め、実際に実行可能な行動計画を作るという作業を繰り返すことにより、何よりも他人と共同して組織として問題解決に進むノウハウ、問題点を全て経験し乗り越

える力が身につくということである。

従って、授業に活気があるとか、賑やかである、さらには面白いとかいう評価と結果的に連動することはあるかもしれないが、それは結果であって、目的ではない。だが現実にはその当たりを大きく誤解したままの受講生が多いのも事実である。その当たりきちんと討議授業を裁けるあるいはプランできる教員サイドのトレーニングが必要である。もどきの授業を体験しただけで、嫌になる、あるいは好きになると評価を下す場合が非常に多いのが双方向型討議型授業と言われる形態である。そういった教育手法を一つの売りにするにしても、また実践して活用するにしても、特に教員サイドの体系的な理解と、トレーニングが必要な状況であることを指摘しておこう。活性化や学生の参加度を促すといったスローガンに扇動されてか、双方向型とか、討議型授業を取り入れようという動きを見せる大学や教育機関があるが、その当たりきちんと理解されていないところでの目先だけの理解でのチャレンジのように見える場合が多い。そのチャレンジを好機として双方向型討議授業の拡大導入が進んでいくことを強く希望する次第である。

[3] まとめ

ここまで雑多な議論を進めてきたが、以下に討議型授業を効果的に実施するために必要な条件というものを簡潔にまとめておきたい。それらは、

1. インターアクティブという意味を正しく理解すること。
2. 十分な予習及び事前準備が必要であること。
(受講生には、資料などの読み込み及び個別の分析。講師側には、授業マップ、シナリオの作成)
3. 議論することが目的にならないように留意すること。議論する価値があるトピックについて議論すること。
4. 正しい間違っているの判断は参加者それぞれによって異なるということを真摯に理解すること。
5. 同じような議論の展開はあるが、参加者のもつ属性によって個別のクラスは全く異なること。

といった事項が重要なポイントである。いずれも、重要かつ本質的なポイントであるのに、多くの場合に教員及び学生双方において、誤解されたり看過されてしまっているといえることがらである。授業活性化や効率化といった目的のために、いわゆる参加型とかインターアクティブ（双方向型）型の授業を、教育手法として取り入れる場合、是非とも再度理解を深め十分な議論と、意識の共有をして欲しい。多くの場合、根本的に上記に上げた項目についての理解や実践が行われないままに、インターアクティブ型授業もどきともいえる表面上は同様に見えて、実は似て異なる形の導入及び実践に終わってしまっている事例が多いということである。双方向型あるいは

討議型の授業形式に対する期待が高まるのは大いに喜ばしいことであるが、そこで実践される授業形式が、似て非なる「もどき」的授業であったとしたら、全く逆の効果を示してしまう。そのことが強く懸念される。

なまはげを例にして、意外感を味方に、注意を喚起しつつ説明を試みた。見かけが同じでも、本質的な部分は全く異なることは多い。だが表面的な具現化している事象だけを見て、本質部分の理解や解析を「無意識」あるいは「意図的でなく」判断してしまうという誤謬は頻繁に起こる。それらの誤謬にも、多くの場合、分析者自身が気づかないことが多い。このことは、「無意識」というか「意図的でない」からいた仕方がないものともいえる。仮にその誤りを指摘したとしても、何らかの改善やプラスへの反転が可能なわけではないであろう。それゆえに拘りすぎることは、非生産的であるし、非常に厄介な問題ゆえに完全な対応策はないといえる。

- ・ 予習をすることによって、事前に必要な情報を得ておくこと、そこから論理的に推論を事前に行うこと。
- ・ 相互間の議論ややりとりは、講師対受講者の間でなく、受講者の間でも行われる。

これらこそがインターアクティブの神髄である。講師と受講者の間だけのやりとりですむならばそれは単純なQ & Aの延長に過ぎない。よって、その状態を続けても議論が深まることはなかなか難しい。

- ・ 具体的な代替案の提示がなされること。万全の考察と議論を通じて、代替案が精練され練り上げられることが大事である。
- ・ 議論する際の重要なポイントは、まず戦略及び行動代替案を構築する際には、そこで提示される反論あるいは質疑を事前に十分予想しそれに対する対応策なり説明を用意することが重要であり、良い訓練になる。事前の代替案の構築及び精緻化において、この想定問答的な考察プロセスは重要である。

別の視点から付加的に述べる。具体的な、討議形式授業が成果を発揮するための重要な要件は、(1) 受講生の準備、予習と、(2) 講師の柔軟な発想である。この2番目の要素は非常に重要である。また、討議型授業をサンプルとしてとらえた場合、成功例、失敗例といった形の単純な評価はなかなか出来ない。それは一つの評価尺度だけでとらえることが無理だからである。個々の受講生、参加者がそれぞれのレベルとバックグラウンドの上において、なにがしらプラスと思えるもの、それらは受講前と受講後という比較において、得たものあるいは認知したのがあると考えたとき、効果を発揮したという評価が単純にえられるからに過ぎない。

また、指摘しておくべき重要な事柄が他にもある。討議型授業は、一方的な講義形式の授業と対局をなすものとして考えられるのが一般的である。そして伝統的な講義形式の授業に比べて、より効果的で成果が上がるものとして喧伝され期待されることも多い。しかし両者はむしろ相反するものでなく、相互補完的なものとして、実際の授業実施者（講師）は、適宜使い分けることが

可能であり、同時に必要であると理解すべきである。授業計画なり講義要項においては、授業によって何がえら得るかといった視点がもっとも多いと思われるが成果の明示が求められる。討議型授業だけでなく参加した受講生たちのどれだけの割合の人間が、どこら辺まで理解が進んだかといった基準と尺度によって、授業、クラスの成果を測定しようとするし、そこで効果の有無が判定される。だが、何回も述べているように、この授業目的自体も、単純かつ一元的なことではないといえる。受講生の面々がつまり授業の構成員が変わることによって、例えば授業でとりあげる教育資材をつかい、同じ講義計画、シラバスに即して授業を行ったとしても、同様の成果や効果は良くも悪くも得られないことも珍しくないということである。

【参考資料】

松岡 賢明『文学周遊 柳田國男「雪国の春」 秋田・男鹿市』日本経済新聞 2012年4月21日付夕刊 10面